
Persona Cross Over World

kumap

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Persona Cross Over World

【Nコード】

N6231X

【作者名】

kumap

【あらすじ】

2012年5月2日鳴上悠は稲羽市に戻ってきた大切な仲間と幸せの団欒を過ごすために……。しかしそれはある一人の男に壊される。

同刻、双子はある目的のために人でなしと罪人に裁きを下すために動いていた。

それは稲羽市にまで及んでしまう。

どうも、最近小説の内容が定まらないkumapです。
やっとな頭に浮かんできた話をまとめて書き上げます。どうぞよろしく
おねいします。

これはP4とP3のクロスオーバーストーリーです。

ハジマリ

ある男に一通の手紙が届いた。
書いてある文章は。

『ツギハ、オマエダ』

その一行だけだった。

「なんだ？何かの嫌がらせか？」

その翌日男は人間には不可能なやり方で殺されていた。

「そろそろ、あいつが着く頃、手厚く出迎えないとな……」

白い無地の仮面に黒いマントをまとった男が死体をまたいで闇に溶けて消えてしまった。

おかえり。

「!?!」

今の声で目が覚め窓を見やる。

『次は稲羽市です』

「もう着いたのか、早いな」

駅を出てすぐ。

「あゝいぼ〜!!」

>案の定。

少し笑みがこぼれてそれが笑顔に変わる。

「久しぶりだなみんな!」

それは束の間の幸せだった。

堂島家 夕方

>ガラッ

「あつ！お兄ちゃん！！」

たたと玄関に駆け寄ってきた女の子は俺の顔を見るとぱあつと笑顔になり。

「お帰り、お兄ちゃん！」（ぼふっ）

「ただいま。」

そのあと堂島家で陽介たちが祝ってくれた。

……千枝たちが作った料理も食べれるようになったな……

「さてと、明日は早起きして菜々子とジュネスに遊びに行くか」

>霧？どこだ、ここ

目を覚ましたら青黒い霧の中、妙に気分が悪い。

>>鳴上 悠。

>！？ 誰だ！

自分の声に聞こえて驚愕しながらあたりを見渡す

いつの間にか目の前に大きな影が立ちはだかり自分を見下ろしているように見えた。

その姿はマントのようなものを着ているように見える、霧が濃くてよくわからない。

>>我が名は宴。^{えん} 鳴上、汝に試練を与えよう。

> 試練？

>>私は“人殺しの鬼”と人々に言われている。

>まさか、この頃テレビで騒いでいる不可能殺人の呼び名

>>まあそのようなものだな……鏡に触れる

>………？何？

>>そろそろ時間だ、せいぜい頑張るんだな。

ばふっ

「………！なんだったんだ今の夢。」

鏡に触れる

あの言葉を耳に眠りに落ちた

イギヨウフタバ

堂島家 朝

「う……ん。」目を覚まして時計を見やる

7:26 いつもより起きるのが遅かったようだ。

「やべっ菜々子に謝んなきゃ」

起き上がると同時に

ガチャ

「お兄ちゃん起きた？」

菜々子が入ってきた

「ああ。ごめん、寝坊した」

「うん。あのね起こそうと思ったたらひとがきてお兄ちゃんにこれわ
たしてって」言いながら右手に持っていた封筒を差し出す。

「ああ、有難う仕度はすんだ？」

受け取り聞く

「うん、パン焼く？」

「うん一枚でね」

「分かった、下で待ってる」

パタン

> 見てみるか

封筒を開け中身を見てみる。

内容の文字には新聞紙の文字ではってあった。

鳴上悠への挑戦状

『この封筒を開けた瞬間からペルソナ使い達以外の時は止まり君たちと刺客の時間となる。』

時を動かしたかったらこの挑戦を受けることだ。

玄関を出れば受けたと見る。

では健闘を祈る。』

宴えん

「ふざけるなっ」

バンッ

悠は思いつきり手紙をテーブルに叩きつけた。

>せっかく平和を取り戻したというのに、また。

そう思ってたつていたところ……今の非現実的な時間に聞くはずのない声が悠を呼んだ。

「おにーちゃんまだー？」

「!?!」

>な、なぜ菜々子が!?!

堂島家 一階

焦る気持ちを抑え階段を駆け下りる。

ガッッ

「うわっ……」 ドンッ 「うう」

駆け下りるスピードが狂いつまずいて階段から落ちた。

「あっ、お兄ちゃんだいじょうぶ？」

菜々子が駆け寄ってくる

「…うん、痛いけど大丈夫」

「よかった、きおつけてね…あれ？」

後ろを振り向いて菜々子がつぶやく

「パンまだ焼けないのかな？」

菜々子がテーブルに近寄ろうとすると。

ドンドンッ

「俺が出るよ」

>危険な相手かもしれない慎重にいこう

「誰ですか？」

『おう、鳴上!』

「陽介!?!」

ガラガラ

玄関を開けると青黒い霧が滝のように入ってきた。

「うわっ!？」

「鳴上!メガネ!メガネ!」

>メガネ?そういえばいつもここに入れてたはず。

そう思いながら胸ポケットに手を入れる

指先に何かが当たった あった

取り出してメガネをかける。

黒く塗りつぶされた視界がはつきりと見えた。

困惑した菜々子の声が聞こえた

「お、お兄ちゃん!?なにもみえないよ!！」

「あ、陽介ちよつと待っててくれ」

「おう!」

菜々子に駆け寄る

「大丈夫か?」

「うん、お兄ちゃんは見えるの?」

抱きかかえて玄関へ向かう。

堂島家玄関前

「陽介!」

玄関を抜け陽介に駆け寄る。

「ああよかった。」

手紙読んだか?」言いながらポケットから手紙を取り出す。

「ああ。読んだ、でも…」

菜々子に目が行ってしまふ。

「…うおっ、すまん気づかなかった……菜々子ちゃんがなんでこの

世界に?」

>?

「世界って?」

「ああ、クマが言ってた、ここは普通の世界じゃなくて“もう一つの稲羽市”だよ。」

> 時が止まったわけではないのか？

「なあ手紙には、俺達以外の時が止まるんじゃないのか？」

うん、と陽介がうなって

「俺にもわからん。でも菜々子ちゃんが来れるってことは…まさか言葉が終わる前に悠が抱いている子供、菜々子が。」

「お兄ちゃん、何にも見えないよ」

不安そうに見上げてくる（菜々子はよく見えないためたぶん見上げて見たのだろう）

陽介が心配そうに菜々子を見た。

「ああ、ごめんなもうちょっと我慢していてくれ。」

とにかくいったんジュネスに行こう」

「ああ、分かった、菜々子、怖いと思うけど俺が守るから安心しろ。」

菜々子の緊張した顔が緩む。

「うん。」

ジュネスフードコート

エレベーターは案の定動かなかったため、非常階段を使ってフードコートに着いた。

> この頃動いてなかったからな、あ、足が……

「はあはあ、げふっ……」

陽介も同じ気持ちだろう……

「あ！ やつと来た！ …… って大丈夫？」

疲れて重くなった顔を上げると、さとしな 里中 かぢえ 千枝が心配そうに顔を覗いてきた。

「あ…… ああ…… だい……… じょうぶ…… だ…… つはあはあ」

> やばい、今後は常に動かないと…体が付いて行かない。

「全然大丈夫って顔じゃないよ」

今度は天城 あま 雪子 ゆきこ が話しかけきた。

そんな話をしていると。

「で、なんで菜々子ちゃんが？」
千枝が疑問を示したのでみんなのところへ行き事情とここまで経緯を話した。

「それ早く言ってくれクマよ、待っててね、今作るクマ！」
事情を知ったクマが少し離れたところで作業を始めた。

「ん、なんでペルソナが覚醒してない菜々子ちゃんがここにいるんだろ？」

「そつえば菜々子ちゃんが手紙受け取ったんだよね？」

菜々子のはつきりした声で頷く

「うん、」

「じゃあ渡した人って郵便の人？」

「ううん、くろいぬのをかぶってしろいおめんをしていた変な人だよ。」

> 黒い布？

「え？こちら郵便の人だったんだけど？なんで悠君のうちだけ？」
数秒の沈黙にクマの声が響いた。

「できたクマー！」

クマが菜々子にメガネを渡した、縁がピンク色のシンプルメガネだ。

「わあすごいきれいに見える！」

悠の腕から降りて周りを見渡す。

「これ、クマさんが作ったの？」

「そうクマよ。一生懸命作ったクマー！」ぼんつと胸を自慢げに叩く。

「すごい」

クマと菜々子が話している途中。

ベチヨ

もう聞くことも見ることも無いであろうあの“異形”

「まさか！」

全員が一斉に後ろを振り向いた。

もう会うはずのない“異形の怪物”シャドウに悠たちは啞然とした。

イギョウフタバピ(後書き)

いつの間にか2000を超えてた(^| ^ ;)

カンシヨウ

宇宙のような背景の前に絵にかいたような無数の目がきよろきよろと誰かが来ないかと思張っているように動いている大きな扉がある。その上には針金で手足を広げて固定されてしまった二人の少年と少女がいた。

この二人は魂になりニユクスという世界に終焉をもたらず人類にとつて最も危険な異形な怪物を誰の手にも渡らせないために封印の礎となっていた。

本来石のような色をしているはずが、本来の姿　　人間の時の姿で針金から解放され啞然としていた二人。

「どうということ？これじゃニユクスがまた復活しちゃうんじゃない」

「その心配は無用でございます。」

紅髪の少女の問いに間を与えずに遠くからご丁寧な口調で少女の疑問に答えた声があった　　女性の声だ。

「…エリザベス……どうということだ？」

少年が声をかける。

「それは主（おん）からご説明があります。テオ！」

エリザベスと呼ばれた女性は誰かの名前を叫んだ。

「はい。ここにおります。」

暗闇と等しき空間に眩しい光が一瞬光り消えたそれと同時にエリザベスと同じような蒼い服に身を染めた男性が立っていた。

「テオ！久しぶりね！」

紅髪の少女が元気にテオと呼ばれた男に笑顔を向ける。

「はいお久しぶりでございますね。時間で言いますと」

唐突に変なことを言いそうになるテオをエリザベスが止める。

「テオ、彼等をベルベットルームへ。」

「ちよっちよっど待って封印はどうするの？“あの子”は私たちが

いなくなるとさびしがるよ！」

『その心配は無用でございます。さあテオ急いで！』
テオは二人に鍵を持たせ、いつの間にかあった青い扉へと連れて行った。

そのあとの事は後々話そう

今私たちは稲羽市という町に来ている…正しく言えば飛ばされただけが。

「でも驚いた、まさか綾時君が出てくるなんて。」

私、音弾 琴音と弟の、音弾 響とニユクスの分身といってもいい存在、ニユクスと一緒に封じた、望月 綾時。

その三人で今はイゴールが言った“自分たち以外のペルソナ使い”を探して町をうろついている。

「まあ、正しくは、“ニユクスの力の断片”が一緒ってことかな？」

「ふわぁ、眠い…で、なんかここ普通の町ではないよな。」

周りは青黒く濃い霧が立ち込めており周囲が全く分からない状況だ。

「ほんと、何にもってわけじゃないけど見えないね…：：：気づいた？」

三人は立ち止まる。

「うん、僕は最初っから分かってたよ。」綾時の手にはどこから出したのか大きな死神が持つような鎌を持っていた。

「俺も分かってた。」響の手にあるレイピアが光って見せた。

「なんだ分かってたんだ…殺るよ」琴音の両手には薙刀が握られていた。

『君たちは呼んでもいないのに何故ここにいる？』

「あなたには関係のないことでしょうっ！」言葉が終わると同時に琴音の薙刀が謎の人物を切り裂く…用に見えた。

『君達“も”ペルソナ使いか…：：：いいだろう君たちも私がこれから始める宴の参加を許そう。』

「まって！君たちもって言った？私たち以外のペルソナ使いはいる

のね！詳しく話っ！？」

数メートル先にいた謎の影が一瞬にして琴音の目の前に立って人差し指を琴音の唇に当てる。

『女は大人しくしていないと下品だよ』間近で見た顔は真っ白（青黒い霧で蒼っぽく見えるが）な仮面をしていた。

「っ姉貴から離れろっ」

ヒュッ

響が切ったはずの影は霧に溶け消えていった。

どんな形で私に絡んでくるのか楽しみにしているよ。

その声は空気を伝って来たのではなく脳裏に響く音だった。

カンショウ(後書き)

こんにちはkumap德斯

やっとP3のキャラクターかけますた

これからどう絡ませようか悩んでいます。
感想や評価をもらえるとうれしいです。

イザナミオオカミ

「何で街中にシャドウが!?!」
菜々子が抱きついてくる。

「お兄ちゃん怖い」 ガクガク

悠はしゃがんで菜々子の頭を胸に押し付ける

「菜々子苦しいかもしれないけどこのままじっとしていて」

「うん」 胸の方からくぐもった声がした。

> 来てくれ俺の力、分かっているだろう!

>> 我は汝、汝は我、汝、双眸見開き再び発せよ!

「『伊邪那岐大神』!」

“それ”は待ちくたびれたように出てきた。

「『メギドラオン』!」

“それ”は柄の周りに大きな円が付いている剣の先を空に突き上げ勢いよく下に振り下ろした。

すると空に無数の紫色の球体が一つになるにつれ下に落ちてきた。

ドオオオン

「吼える『スサノオ』!」

伊邪那岐大神が役目を終え消えると同時に陽介のペルソナ『スサノオ』がまだ残っているシャドウに襲い掛かる。

「『マハガルダイン』!」

シャドウがたまっている場所の中央に大きな竜巻ができ複数のシャドウが掻き消えていった。

「いつさえ『スズカゴンゲン』!」

今度は千枝のペルソナ『スズカゴンゲン』が無数のシャドウを目にも止まらぬ速さで蹴散らしてゆく。

「…! 鳴上後ろ!」

徐々にペルソナを召喚して疲れていた悠は警戒を怠り振り向くとシャドウがものすごいスピードでこちらに迫ってくる。

> 陽介も千枝も雪子もみんなのフォローは間に合わない！かといって今ペルソナを出したとしてもどのみち倒れてしまっとうする！？考えるより先に体はシャドウに背を向け菜々子をかばう姿勢に入ってしまった。

> つこれで持ちこたえられるか！？

ガッ

> ……？衝撃が…来ない？

目を開けて様子を確認すると大きな盾を持ち鎧を着た髪の長い女性が目の前に立ちシャドウの突進を防いだ。

> ペルソナだ……いつたい誰の？

「！…菜々子大丈夫か？！」

菜々子は悠の胸の中でブルブル震えていた……そしてその手には。

> カー…ド……まさか

「お兄ちゃんななこ……だい……じょう……ぶだよ」

言い終わると同時に悠の腕の中でぐったりと脱力する。

「菜々子！？…菜々子おおー！ー！」

シャドウを片づけた後悠の周りに皆が集まる。

さつき見たことをみんなに話す。

「嘘……じゃあ菜々子ちゃんがペルソナを使ったってことになるよ！」

千枝が動揺しているとすぐに分かるような声を出した。

「ちよつといい？」

りせが菜々子に触れてペルソナ『カンゼオン』を呼び出し調べ始めた。

「すごい、優しいペルソナ、でも攻撃はできないみたい、菜々子ちゃんらしいね。」

「じゃあ何ができるペルソナなの？」

「えっと、防御、回復、補助が高いよ。」

陽介がストレートに疑問を吹っかける。

「何で菜々子ちゃんがペルソナを使えるんだ？」

しばらく沈黙が続いた。

「テレビの中に入ったからでは？」直斗がうなずける答えを出した。

「あゝ…でも菜々子ちゃんの影でてなつかたけど…」

また沈黙が降りてきた。

「もしかして、菜々子は俺たちみたいに影が出てくるほどそんなに闇がなくて素直だからじゃ」

悠の腕の中から声が漏れた

「うん……ん……？」

「あ、菜々子ちゃん眼覚めた？」

「さっきの話は後回しにしようまずは安全な場所をさがさねえーと

！」

「菜々子、寝ていていいんだよ」

「うん…」

菜々子は悠に体を預け寝息を立て始めた。

> 相当疲れたんだな……………？

立とうとしたときに不意に視界に塔が見えた。

「塔？こんなところに高い塔なんかあったか？」

「どっした鳴上？」

「いや、あんなところに塔なんかあったか？」

「え？うおわっホントだったなんかでっけー塔がある！？」

全員、悠と陽介が向いた方向に顔を向ける。

「何アレ、」「嘘…」「うわ」

皆の口から信じられないといわんばかりのつぶやきが出てきた。

りせが震えた声で言う

「何？あそこ、ものすごい数のシャドウがいる…しかもほとんどが強い…」

> 誘っているのか？

「とりあえずいったんジュネスから出よう。」

『見つけた』

不意に後ろから女の声がした。

「こんどは何!?」千枝がイライラを隠せない声で振り向く…みんなも振り向いた。

振り向いた先には一人の少女がいた服は真っ白なワンピース、手には何やら分厚く大きな本を持っていた。

歳は高校2年ぐらいだろう。

『私はあなたといなければいけないの』

>どこかで会ったような懐かしい感覚…?

「お前いつたい何もんだ!」陽介は動揺しているのか少し震えている

『誘美 黄泉：私の名前だと思う』

「はあ!?意味わかんねーぞ!大体を前はいつたい何なんだって聞いてんだよ!」

『分かんないよ!私は誘美黄泉!鳴上悠と一緒にいなきゃいけないとしかわかんないんだよ!』

黄泉は声を張り上げ泣きそうな顔だ。

「陽介ちよつと菜々子抱いてて。」菜々子を陽介に預ける。

「いきなり変なこと言うけど、きみ前俺と会ったことない?」

『ある』即答

「どうで」

『わからない』再び即答

「……………」

『……………』

悠が質問を続ける。

「どこから来た?」

『……………えっと…名前は思い出せないけど、大きくて暗い洞窟のような場所。』

>思い出せない?

「君、記憶喪失かもしれない」

そのあといくつか聞いて分かったのがペルソナを使えることと伊邪那美大神に何か関係があることしかわからなかった。

『塔に行けば何かわかるかもしれない』

イザナミオオカミ（後書き）

菜々子にペルソナ使わしたの失敗か？

塔

一方どこかの広間

『ヨモツイクサ。悠たちと侵入者はどうなっている？』

仮面の男が細長く手の様なところがウネウネとした人ではない何かに問いかけた。

悠サマハコチラ二向カッテイル様子。例ノ三人モコチラへ向カッテイル様デス

『そうか、なら、もうそろそろ、歓迎の用意をした方がよいだらう……手厚く歓迎しなさい。』

カシコマリマシテ

影は一礼をし、闇に溶けて消えていった。

>…迎えに行くのでしょうか。

稲羽市 道路脇

今、悠たちは大きく天にも届きそうな塔に向かって走っていた。

「はあはあ…っ一向に…近づいて…こないな…」陽介が疲れ切った声で呟いた

無論近づいていないわけではない…ただ悠は何かが不自然だった。

>いくら高くてももう近づいてくるはず…なんだ？何かが不自然だ。疲れ切った体はもう動きたくないとはかりに軋む。

だが悠はそれを無視して周りへと気を配る。

まず、駐車禁止の標識。

次に、右に曲がり角。

その次に、停車禁止の標識。

次は……？

> 同じ風景？……！？

視線を前に戻すと仲間たちがいなくなっていた。

「陽介！？陽介！千枝！菜々子！！みんなどこだ！？」

「慌てるな。私はお前を迎えに来ただけだ。」

不意に後ろから自分の声が聞こえた。

「私が今考えていることはこれから塔につく客人をもてなすための、最後に必要な大きなもてなしを考えていてな、そこでお前にその役目をやるうと思っ……」

仮面の男は宙に浮いていて悠は見上げなければならなかった。

ただ悠はその人影に何か違和感を感じていた、一度倒したはずのあの敵を思わせるような雰囲気を漂わせていた人影を人三倍警戒していた。

「誰……だ？」警戒しながらも正体を聴く。

「前にも行ったであろう……“宴”と……まあ無駄話はそこまでにしておいて本題に」

「ふざけるなあっ！」

悠は混乱した末にペルソナの力で新幹線顔負けの速さで宴へと突っ込んでいつの間にか持っていた十握剣とつかのつるぎを握りしめ宴を切った……感触しか伝ってこなかった。

「！？」即座に降り立ち周りを警戒してあたりを見渡す。

しかし、そんな悠の警戒を何らとすり抜け悠の背後に回った“宴”。悠が気づき後ろを向いて剣を振ろうとしたときにはもう遅かった。

ドッ

……宴のみねうちで悠は気を失った。

『……これで宴の準備は終わった……あとは客人を待つばかり……フフッ』

宴は悠を担いだまま霧の溶けて消えていった。

「いったいどうということだよ！悠がいなくなっちまうなんて！」
今陽介たちは悠がいなくなったことに気づきパニック状態に陥っていた。

「どうしよう…どうしよう…どうしよう…」半泣き状態で千枝がつぶやく。

数分のパニック状態を沈めたのは陽介だった。

「とりあえず塔に行ってみるしかない。」

もしかしたら悠は違う場所を通って塔に向かっているかもしれない！」

七人と一匹（？）がそろって少し不安な色を見せながらもうなずいた。

そして再び走り始める。

塔はすぐ目に前に迫ってきた。

入口は洞窟のような形をしておりその先は真っ暗な闇だった。皆が入口に立つと。

階段のような物は上ではなく下におりていた。

さすがに不気味に思うだろう。

だが、陽介たちはそんなことに気にも止めず先に進んだ

塔（後書き）

今回は執筆中に何度もトラブルが起きて短くなってしまいましたごめんなさい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6231x/>

Persona Cross Over World

2011年11月14日08時06分発行